

ちょっと ブレイク しませんか？

第 22 回

라이어・라이어 [1997年 米国]

イソップ寓話集に「旅人と真実の女神」と題する小話がある。

旅人が荒野で、女がひとり悄然(しょうぜん)と佇(たたず)むのを見た。「一体誰です」と尋ねると「真実です」と答える。「どういう訳で町を捨て、こんな所にお住まいか」と問えば、女神の言うには、「以前には、嘘は少数の人の所にしかなかったが、今は誰の所へ行っても、聞くも語るも嘘だらけですから」

フレッチャー（ジム・キャリー）は、口八丁手八丁の嘘で次々に勝訴するやり手弁護士。美人上司ミランダは、ほかの弁護士がモラル的に断った依頼人の裁判に勝ったら昇進させるという餌を、彼にちらつかせる。その依頼人サマンサは浮気が原因で夫から離婚訴訟を起こされているうえ、浮気をしたら離婚後は一切財産を受け取る資格はない、という結婚前の契約にサインしており、どう見ても勝ち目はない。しかし、フレッチャーは得意の嘘に自信があり、二つ返事で引き受けてしまう。そんな見下げ果てた仕事に精を出す彼は、離婚した元妻オードリーと暮らす最愛の息子マックスの誕生パーティに行く約束をすっぽかす。マックスが「たった1日だけでいい、パパが嘘をつきませんように」と願い事をすると不思議なことに、翌朝からフレッチャーは嘘が全くつけない男になっていた。

自慢の嘘と詭弁を取り上げられたフレッチャーは法廷で苦境に立つ。やり手女検事ダナを相手に悪戦苦闘の連続。もはや万事休すと思われたその時、インスピレーションが閃き、サマンサが夫と結婚した時は年齢を詐称して、まだ17歳だったことを突き止めた。未成年の結婚前の契約は無効という法律を引き出し、ついに勝訴を獲得。サマンサは莫大な財産を勝ち取った。だが、フレッチャーはこんな形の勝利に初めてむなしさを覚え、裁判長に「法律を曲げた勝利なんか正義じゃない！」と叫び、法廷侮辱罪でブタ箱行きに。だが、こうしている間にもオードリーはマックスを連れて、再婚を迫るジェリーと共にボストンへ向かってしまう。フレッチャーは空港に着いた時、既に機は離陸態勢にあった。だが、彼はクラブ車に乗って猛然と機を追いかけ、ついには飛行機を止めてしまった。その誠実な姿に心打たれたオードリーは、ボストン行きを思いとどまる。担架の上で、フレッチャーはマックスを抱きしめた。1年後、マックスの誕生日を一緒に迎えた3人の姿があった。

少年時代「嘘つきは泥棒の始まり」と戒められるが、大人になると「嘘も方便」と教えられる。二十世紀を震撼させたナチス宣伝相ゲッペルの「嘘も百回云えば真実になる」という言葉は有名だ。第二次大戦末期の大本営発表に国民の多くは白けたという。アベノミクスの行方はどうであろうか。真実よりも嘘が優先される時には、人間の生活は最悪になることは明らかだ。ジム・キャリーはコメディ俳優で有名だが、うつ病を体験したとも云われている。



精神科医・映画評論家

かゆ かや ゆう へい
粥川 裕平

名古屋工業大学 名誉教授
岡田クリニック 常勤医師